〔展示報告〕

選ぶ、並べる、魅せる。
―大学図書館で展覧会を企画する

ティムソン　ジョウナス

1．はじめに

本稿は、2022年３月23日（水）から４月28日（木）にかけて開催された早稲田大学図書館における展覧会「遺す、写す、広める。―東西の写本展」の開催報告を中心に、学生の研究への興味・関心に寄与する大学図書館における貴重書の展覧会の在り方について考察するものである。

2．企画の経緯（大学図書館で貴重資料を持つことの意味。これまでの展覧会企画）

国内有数規模の貴重書所蔵数を誇る当館における展覧会のほとんどは、貴重書に関するものである。

大学図書館が貴重書を収集することには、研究・教育の促進、文化資産の保存、コレクションの充実、図書館（ひいては大学）のブランディングなど、様々な意味があるだろう。いかなる経緯であっても、ひとたび貴重書が大学図書館に所蔵されたら、それは専用の倉庫に保管されるのが定石である。申請による出納が基本で、誰でも触れられる（開架スペースに配架される）類の資料ではないという性質上、図書館側が努めて情報発信をしない限りは、その多くが「死蔵」の運命を辿ってしまうことになりかねない。資料自体の価値の面でも、収蔵に至るまでにかかっているコストを

考えても、大学図書館において貴重書を収蔵している限りは、情報発信を兼ねて、定期的に展覧会を実施することが肝要だろう。

かつて当館で展覧会を担当していた松下は、図書館における展覧会の類型を以下の四つのように分類している[1]。

① メモリアル・セレモニーとしての展覧会
② 教育・研究目的の展覧会
③ 図書館の広報・利用者教育の一環としての展覧会
④ エンターテインメントとしての展覧会

いずれの類型の展覧会も、大学図書館において欠かせないものではあるが、大学の本分―研究と教育―を考えたとき、主となるのは②の「教育・研究目的の展覧会」だといえるのではないだろうか。しかしながら、この類の展覧会はひとたび「研究」を意識すると特定のトピックに偏ったり、内容が深くなりすぎたりして、松下も指摘している通り、堅苦しいものになってしまうきらいがある。実際に、当館が実施してきた展覧会が一般的な観覧者（特に利用者の大部分を占める学部生）の目線にたったものだったかというと果たしてどうだったか、と問う声は少なからず館内からも聞こえていた。

大学図書館における貴重書の展覧会について、多くの観覧者に興味を持ってもらい、足を運んでもらうには、どのようなコンセプトに立つことが望ましいのか。

今回の展覧会にあたっては、大学の本分である「教育・研究目的」を主軸としつつ、誰にでも親しみやすいように、テーマを広範にしつつ、「エンターテインメント」（松下は「見てたのしいもの、目に快いものを並べ」る娯楽のための展覧会を提唱している）とまではいかずとも、「親しみや

(1) 松下眞也.「図書館と展覧会」, 早稲田大学図書館紀要, 43, 1-46. (1996)

すく楽しめる」要素を盛り込むことが一つの鍵となると考え、テーマの策定および設計を行うこととした。

3．構想

3－1　所蔵資料について

当館の特色について触れる際、よく引き合いに出されるのは、国宝二点、重要文化財五件（百八十七点）を所蔵しているという点である。当館においては、もちろんこれらの他にも文化的所産といえる資料が洋の東西を問わず多数所蔵されており、それらの中でも写本資料が占める割合は比較的大きい。例を挙げてみても、源氏物語の各系統の写本から西洋彩色写本、東南アジアの貝多羅葉まで、さまざまな時代、地域、形式の写本を有している。

しかしながら、これまでの当館における展覧会を振り返ったとき、各種テーマにそって展示した資料群の中に写本が含まれるようなことがあっても、これまで「写本」をメインに据えた展覧会が開催されたことはほとんどなかった。そこで、今回は写本をテーマに選び、来場者が特定の層に偏らない内容になるように、様々な地域や種類の写本を並べた展覧会を企画することにした。

3－2　タイトルとセクションの設定

多くの観覧者、特に学生の興味関心を啓蒙することを目的とするのであれば、多くの人に訴求しやすいタイトルを掲げる必要があるだろう。本やウェブページなどに付与するタイトルが、売り上げや集客（アクセス数）において大事な意味を持つ例を待つまでもなく、展覧会においてもタイトルが観覧者の数を決めるといっても過言ではない。

今回は「遺す、写す、広める。」とし、写本というものがどのようにして作成され、広がっていった（伝播していった）か、ということが一目で

分かるタイトルを定めた。副題の「東西の写本展」は、広いテーマを設けることによって、対象地域や時代を一点に絞らず、より多くの（潜在的な）観覧者を取り込むことを目指したものである。この二点が揃っただけでも、観覧者が展覧会のイメージを掴むには充分であったと考えている。

展覧会のあいさつ文にあたっては、展覧会のコンセプトが的確に伝わるよう、学術的な用語を用いることを極力避け、分かりやすい言葉を選んだ文章の作成を心掛けた。

また、実際の展覧会構成を考えるにあたり、どんな種類の写本が展示されているかを一目で確認できるようにするため、各セクションの標題にはシンプルな言葉を選んだほか、観覧者がそれぞれのセクションに入り込みやすくするための導入文には、物語調を選んだ。以下、その実例を提示する。

「ごあいさつ」

文字の発明以前、長きにわたり、人々は口承によって、さまざまな事柄やその意味、言い伝えを伝承してきました。しかしながら、人間の口から発せられた言葉―音声―は、わずかな時間で消え去ってしまいます。さまざまな事柄の継承は、実に、それらを司る人それぞれの記憶が頼りであったといえます。物事の伝達を話し手と受け手の記憶にのみ頼る方法は、物事を広く長く行き渡らせるには限界がありました。皆さんの中にも、伝言ゲームの難しさを痛感したことのある方がおられるのではないでしょうか。そこで人間は、文字を発明することで、記憶を目に見える形にし、共有することに成功し、高度な社会、文明を形づくってきました。文字によって、我々人間の歩みは「歴史」として紡がれ、また、紐解くことができるようになったといえましょう。以来、印刷技術が普及するまで、人々は様々な事柄を手写する形で書き遺し、書き継いできました。書写された場所や書かれているものは東西で違えど、大事なものを書き遺しておこう、広めていこうとする試みには、共通する要素を見出すことができます。そこには、まさにわれわれ人間の普遍的ないとなみそのものが表れているの

です。当館に所蔵されている東西の写本を通して、人間の歩みを垣間見てみましょう。歴史の貴重な１ページたちをどうぞお楽しみください。

「ことば・ものがたり」

文字が発明されて読み書きが可能となるに伴い、人々は、日々交わされている多くの言葉、そして己の想像や思考の産物を書き記しておくようになりました。

身の回りで使われている文字や言葉をつぶさに集めて、その意味・読み方を書き記すことは、口承の限界を超え、より多くの範囲に、言葉とその意味を広く普及させることにつながりました。

また、書き残された数多の作品や物語のなかでも、多くの人が感銘したものは、それらを遺しておこうと望む人、あるいは、それらを読みたいと願うさらなる人々のために書き写され、広まっていきました。

こうして、後世に生きる人々も、それらを読んだはるか昔の人々と同じ悦びを、普遍ものとして共有することができてきたのです。

「心のよりどころ」

人々は古来より、己が能く生きるため、また、お互いの幸せを追求するために、心のよりどころとする信仰や思想を体系化し、それらを実践してきました。

「教え」やその実践をより多くの人に伝え、広めるにあたっては、口承（つまり唱えること）に加え、もちろん、筆記・筆写が行われ、読み方や唱え方、意味を正しく伝えるための様々な試みが行われてきました。

いつしか、信仰や思想にまつわるものを筆写する行為は、教えを多くの人に行き渡らせる目的を超えて、教義への理解を深めるための行為としてだけではなく、その価値を文字の美しさや装飾で表現することにも発展し、各々の土地で一つの文化を形づくっていきました。

「きまりごと」

人類はいつしか、ひとつの土地に集落を作り、社会を形成するようになりました。多様な人が行き交い、住み、社会の規模が大きくになるにつれ、人々を一定の秩序のもとに管理するための、きまりごと―法律―が定められるようになりました。そして、一つの社会の支配が及ぶ地域に広く法律を行き届かせるにあたり、各地ではさまざまな形で法律が書き写され、通達されていきました。社会における法律の普及は、法律を扱うことを生業とする人たちを生みました。定められた数々の法律は、ただ単に人々に通達するためだけでなく、体系的にまとめられ、法に携わる人々によっても書き遺され、受け継がれてきました。

3-3　展覧会の方針（キャプションの作成、資料を通した研究への興味・関心）

各資料の解説（キャプション）についても、極力学術的な内容に偏りすぎることのないように、各セクションの導入文同様、平易な文章で、親しみを持てる内容で書くことを心掛けた。その資料が何であるのか、どんな意味を持っているのかといった資料の概要を理解してもらうことを含め、資料そのものへの関心を掻き立てることを目的に据えたものである。

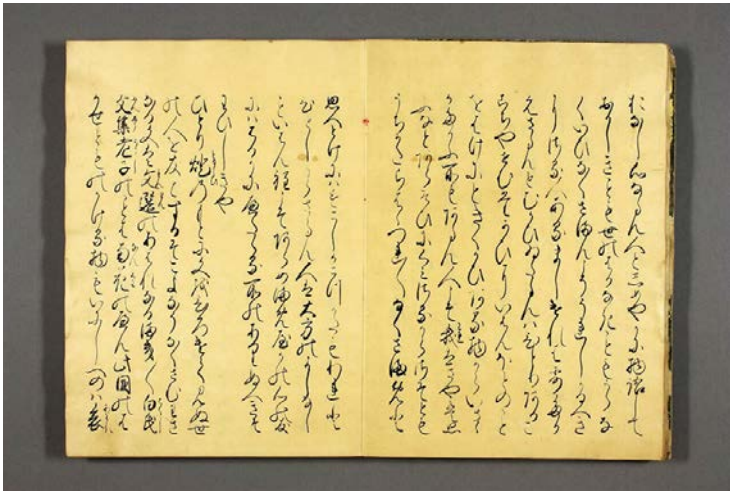
また、観覧者の中にいる「潜在的な研究者」を導くために、写本を扱った研究事例をいくつか取り上げて、その手法や成果の分かりやすい事例を示した。なお、研究事例の紹介においても、高度な解説は、反対に資料や研究分野への敷居を上げてしまうことになりかねないため、極力分かりやすいものを選ぶことに留意した。

以下、キャプションの実例と研究事例紹介の実例を例示する。

＜キャプション＞

つれつれ草（徒然草）へ10 6865／文庫30 E99

室町時代初期の写本（へ10 6865）



江戸時代初期の写本（文庫30 E99）

人の有り様を、あらゆる角度から見つめる、兼好法師のまなざし。そして説かれる道理。13世紀後半から14世紀前半、すなわち鎌倉時代末期から南北朝時代の動乱を生き抜いた、歌人の言葉。それが21世紀の現代人の感性にびんびん響く。人間は人間、700年経とうが変わらない。人間の醜さ、美しさ、愛らしさ、素晴らしさ、その「まこと」を射抜いた言葉だからこそ、遺され、伝えられ、広められてきた。本資料は、兼好法師没後、室町時代初期に書き留められた写本（へ10 6865）と、江戸時代初期の写本（文庫30 E99）である。江戸時代中頃以降、「つれつれ草」は「伊勢物語」とともに、日本の古典文学作品として、盛んに刊行され、庶民に広く愛されるようになる。

The fragments of tàla leaves of the unknown Buddhist sutta.（貝多羅葉）
Call no. ND 1640

貝多羅葉（ばいたらよう）の写本（ND 1640）

写本と言えば、和紙や羊皮紙、あるいはパピルスが想像されがちだが、東南アジアや南アジアでは、ヤシの葉が広く採用された。それら筆記媒体としてのヤシの葉は「貝多羅葉」（ばいたらよう）しばしば略して「貝葉」（ばいよう）と称される。あまり知られていないが、前述の地域では写本

の主要な筆記媒体であり、極めて重要な史料として遺る。文字はペン書きするか、鉄筆で削る（さらにその上から顔料を乗せることもある）等で記される。国内では、８世紀に伝わったとされる法隆寺伝来「梵本心経并尊勝陀羅尼」が東京国立博物館蔵で重要文化財に指定されている。今回の展示資料は仏典で、筆写時期等は不詳である。形態としては、ヤシの葉を重ね、竹等の木の板で挟んだ上で、穴を穿ち、糸で綴じるのが一般的である。ポーティ様式と呼ばれ、ヤシの葉の両面に文字が書き付けられる。筆写の順番は、一番上の葉の表、裏、次の葉の表、裏、以下同様である。

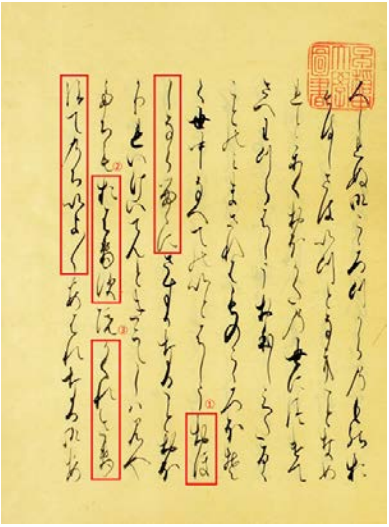
切支丹制札武州多摩郡境村1711年（正徳元）ハ7 4666

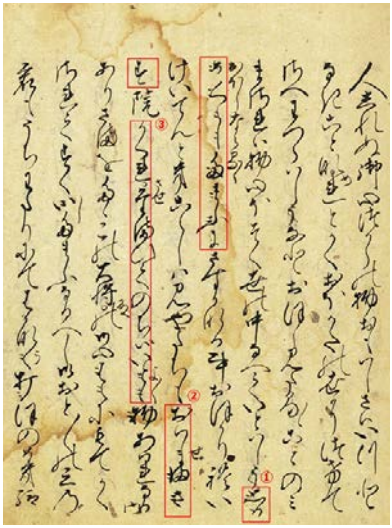
切支丹制札（ハ7 4666）

本資料は高札（こうさつ・たかふだ）とも言い、こちらの呼び名の方が馴染み深いかも知れない。高札は、主に江戸時代、板面に墨書で法度・禁令などを書き、それらの法を速やかに伝達させるため、町辻など目のつく場所に掲げられた。展示の高札は、キリスト教の取り締まりに関するもので、宣教師や再び信者となった者などを密告すれば褒賞金を与えるという内容である。

＜研究事例紹介＞

本文について―テクスト研究―





①おぼしならるるに
②おはせす
③かくれさせ給てのちいよいよ

①思いめぐらせたまふに
②おはしまさす
③かくれ給てのちはいととも

ひとしれぬ、御心つからの物おもはしさは、いつとなきことなめれど、かくおほかたのよにつけてさへ、わづらはしうおほしだみるゝことのみまされば、もの心ほそく、世中なべていとはしうおほしならるゝに、さすがなることおほかり。

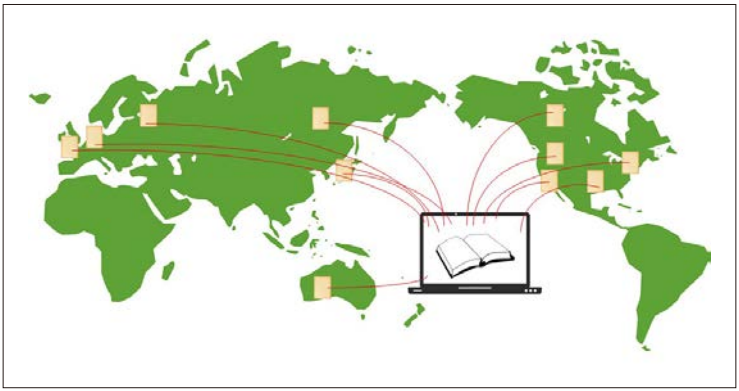
れいけいでんときこえしは、宮たちもおはせず、院かくれさせたまひてのち、いよくあはれなる御ありさまを、たゞこの大将殿の御心にもてかくされて、すぐしたまふなるべし。　（本文は、いくつかの校訂版を参考）

左：早稲田大学図書館所蔵『源氏物語』花散里巻より（青表紙本系統）画像一部改変
右：東京大学総合図書館所蔵『源氏物語』花散里巻より（青表紙本、河内本、別本の混態本）画像一部改変

人々がたくさんの事柄を書き残してきたおかげで、現在に生きる我々も、当時の生活や娯楽のありようを知ることができます。例えば、『源氏物語』は、我々も文庫本や教科書を通して親しんでいるものですが、果たして我々が読んでいるものは、物語が書かれた当時の人が読んでいたものと同じものなのでしょうか。遺されている様々な写本を見比べてみると、実は我々が読んでいるのは、様々な調査、検討を積み重ねて校訂されたものだということが分かります。物語を人々が書き継いでいく段階で、写し間違いや写し手の解釈の入り込みなどのさまざまな要素が、ある一つの本文の形成に影響していることが分かってきています。正しい本文はいったいどれなのか。この写本の本文はどこから派生したものなのか…。現存する各写本の本文を見比べて、より正しい本文や異なるテクストの成立過程、写本同士の関係性などを検討する面白さが写本研究にはあります。

書物のデジタル復元―破壊された書物たち―

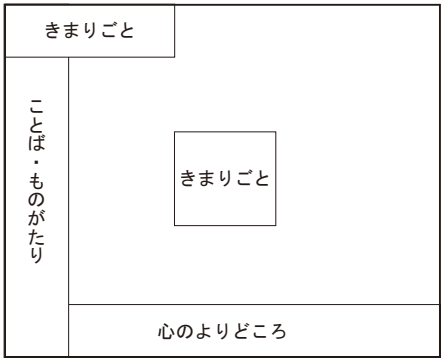
皆さんがご覧になっている写本の零葉は、もともと一枚ものとして作られたものではありません。これらはもともと一冊の本の一ページでした。一つの写本から各々のページが切り取られる理由は様々でした。飾って楽しむためであったり、売って利益を得るためであったり、より多くの人に写本について知ってもらうことを目的として図書館や博物館向けに販売するためであったり。貴重な書物から一枚一枚を切り取る「書物の破壊者たち」がいたのです。切り取られた写本の零葉は現在、世界中の多くの愛好家や図書館・博物館によって所蔵されており、我々はそれらの多くを目にすることができます。しかしながら、一枚の零葉だけを見ていても、分かることは限られています。では、これらが再び一つの写本の形になったら…？デジタル技術が発達した今、それぞれの書物の零葉を持っている図書館や博物館、愛好家が協力し、一つの写本をデジタル復元しようとする試みが生まれています。



Reconstructing the Beauvais Missal　https://brokenbooks2.omeka.net/
ボーヴェ典礼書写本のデジタル復元プロジェクト。本展示のSingle leaf from Calendar, containing text for February and March.（F198.2 1199）もこのボーヴェ典礼書からのもの。

4．配置、展示のプロセス

展示資料は、下記の図のようにレイアウトを行なった。資料の配置自体は、一般的な展覧会同様、資料の形式や特性に従って行なった（額装のものはピクチャーレールに、洋装本はブックレストに、等）。



展示室のレイアウト

多くの展覧会には順路があるかと思うが、今回は、「ものがたり」、「心のよりどころ」、「きまりごと」といった、いわば人間の普遍的ないとなみに着眼点を置いていることもあり、（いずれが先にできたものかもはや分からないことも意図して）特に順路を指定する事なく、どこから見始めても楽しめることを意図した。

展示室の概観

なお、現在当館では所蔵する貴重資料のさらなるデジタル化（国際的な枠組みIIIF規格での画像公開）にも力を入れている[(2)]。今回の展覧会で展示した資料の中にもIIIF規格での撮影事業の対象となったものがあったことから、その事業の紹介を兼ねて「貴重資料を遺す～早稲田大学図書館によるデジタル技術導入の試み～」と銘打った貴重資料撮影事業の紹介VTRを、デジタルサイネージを設置して再生した。

(2) ティムソン ジョウナス，山本 さぎり.「早稲田大学図書館における貴重資料のデジタル化の取り組みについて ～これまで・現在・そしてこれから～」，ふみくら：早稲田大学図書館報，102，3-6.（2022）.

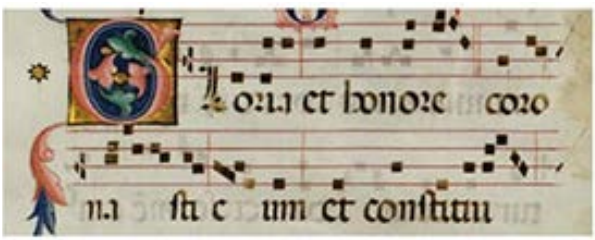
デジタルサイネージ設置の様子

また、先に示した「あいさつ文」でも言及しているように、当展覧会のコンセプトの一つに、東西の写本に共通する要素を見出すことがある。例えば「心のよりどころ」のセクションでは、朗唱する類の資料（大般若波羅蜜多経、ローマ聖歌、クルアーン）を並べ、それぞれの写本を比較検分できるようにした。画像からも確認できるように、宗教は違えども、信者に経文などを正しく読ませるための工夫（節々の区切りや抑揚の表し方）が書き記されていることを、展示資料を通して観覧者は知ることができる。

普段、自分の関心分野の勉強や研究に集中している学生にとって、分野を越えてものごとを考える、分野を横断してものごとの共通性を考える、ということはさほど多くないのではないだろうか。このような点において、一つの函の中に古今東西の多様な資料が収められているという図書館の最大の特徴を利用しない手はないだろう。実例を示すことで視野を広げる手助けをすることも、図書館における展覧会の重要な役割の一つといえるのではないだろうか。

中には展示資料を目にして経文や聖歌が実際にどのように唱えられてい

展示の様子（「心のよりどころ」のセクション）



ローマ聖歌（左上）、クルアーン（左下）、大般若波羅蜜多経（右）
それぞれ、唱え手に正しく唱えさせるための節の区切りが書き込まれていることが分かる。

たかを知りたくなる観覧者もいるだろう。そういった点も考慮して、ローマ聖歌やクルアーンが唱えられている映像を確認できるYouTubeページへのリンクをQRコードで示す工夫も行った。

5．広報

より広い層にアプローチすることを狙いとし、本学の文化資源データベース内のバーチャルミュージアムに、当展覧会のバーチャル展覧会を設けた。バーチャルミュージアムの取り組み自体は、この展覧会以前から行ってきていることではあるが[(3)]、かねてより実際の展覧会の開始日に合わせて開設し、キャプションの内容や各資料の展示箇所も実際の展覧会を忠実に再現することを心掛けている。そのため、遠方に居住していて、実際の展覧会を訪れることがかなわない方々にも、展覧会の雰囲気や楽しさを伝えることができている。さらには、実際の展覧会の会期後も、継続してバーチャルミュージアムを公開することで、観覧者が「リピート訪問」して展覧会の内容を改めて楽しむことができるようにすることも可能にしている。また、バーチャルミュージアムは、それをきっかけに展示資料に興味を持ってもらい、実際の展覧会の訪問につなげるといった、集客・誘導ツールとしての用い方もできるだろう。

なお、当館では、展覧会の広報のために、定期的なSNS投稿を行った。当館ではウェブサイトのニュースページを使っての広報ももちろん実施しているが、やはりウェブサイトが訪問されてこその媒体であるのに対し、SNSはユーザーによる投稿の拡散機能があることが、お知らせのより一層の広がりを期することができるポイントだといえる。TwitterおよびFacebookへは、会期中、通算40回程度の投稿を行っており、必ずしも多いとは言えない数ではあるが、一定の数の拡散があった。

---

(3) 嶌田 修.「バーチャルミュージアムにおける貴重資料の紹介について」, ふみくら：早稲田大学図書館報, 99, 6-7. (2021)

6．反応

新型コロナウイルス感染症の発生以来、当館では来館者のための芳名帳および感想ノートの設置を中止している。そのため、来場者の反応を知るにあたっては、TwitterやFacebook、InstagramなどのSNSの書き込みが頼りとなる。「早稲田大学図書館」や「東西の写本展」などのキーワードを用いて、SNS上の当展覧会に関する書き込みを検索する限りでは、決して数が多いとは言えないものの、「とてもいい展示だった」、「素晴らしかった」、「ささやかな発見があった」などの来場者による感想のほか、中には当館に代わって当展覧会のコンセプトやバーチャルミュージアムを宣伝する書き込みも見られた。

ちなみに、図のように来場者に対して「#遺す写す広める」、「#東西の写本展」といったハッシュタグを使って感想を投稿してもらうようSNS上および会場で案内を出しているが、なかなか協力が得られていないのが実際のところである。

来場者の反応をダイレクトに得られるという点では、感想ノートに未だ実効性があるということだと思われるので、今後の感想ノートの設置の是非およびその方法について検討をしていきたい。

7．来場実績

当館では、展示室の来場者数を計上するために、赤外線センサーの付いた簡易カウンターを使用している。

当展覧会はひと月余りの会期で計6,181名もの来場者数を記録した。当展覧会の前に開催された2021年度秋期展覧会の来場者数が2,329人、当原稿執筆中に開催された2022年度秋期展覧会の来場者数が3,174人だったことを考えると、今回の展覧会における、広範な観覧者を念頭に置いたテーマおよび内容設定の狙いは適切であり、また、キャプションや広報などの工夫は、功を奏したと考えることができるのではないだろうか。

8．おわりに

以上、「遺す、写す、広める。―東西の写本展」の展覧会をその過程から振り返った。今回の報告は、聞き取り調査を行ったり、来場者数やSNSの拡散数を分析したり、といったようなエビデンス・ベースの手法に沿ったものではなく、「考え方」を主軸とした内容になってはいるが、誰に向けたテーマにするのか、どんな資料を出すのか、といったことを入念に検討・設計することで、大学図書館における展示会においても、広範な来場者を呼び込むことができるのだということを示す一例となったと考えている。

しかしながら、企画・設計が来場者数にどのように影響するのかということは、今後開催される展覧会における来場者数の推移、SNS上での広報の広がり方、来場者からの感想（なるべく多く収集したいところである）などの分析を通して、より明らかになっていくものと考えられる。そういった意味では、大学図書館における展覧会を活性化させるために考えるべきことはまだまだ多くあるといえよう。

今後、より一層効果的な展覧会の企画設計、広報活動ができるよう、当館の職員一同、努めていきたいと考えている。

展示資料一覧

セクション	タイトル	請求記号
ことば・ものがたり	［源氏物語］［書写資料］/［紫式部］［著］	へ2 4867 51（1-54）
	［源氏物語］［書写資料］/［紫式部］［撰］［室町後期］	文庫30 A2 1-55
	つれつれ草［書写資料］．上巻 /［吉田兼好］［撰］	へ10 6865
	つれつれ草［書写資料］．上，下 /［吉田兼好］［著］［江戸初期］	文庫30 E0099 1-2
	玉篇［書写資料］．巻第 9 /［顧野王］［撰］	ホ4 2555
	［Mirrour of the blessed lyf of Jesu Christi］.	NE 3691
心のよりどころ	［Single leaf from Book of hours, containing beginning of the Hundred articles of the Passion of Christ］.	F198.2 1196
	［Gregorian chant］.	文庫33 247
	［Single leaf from an Antiphonary］.	F198.2 1198
	［Single leaf from a gradual, the introit of the mass for Christmas Day］.	F198.2 1195
	［Single leaf from Calendar, containing text for February and March］.	F198.2 1199
	［Hore beate virginis marie］（時祈書）	文庫33 104
	Tāla leaves of the Buddhist sutta: ［Tumape-pviṁ-nitnitaṁ］	ND 1638 = 特
	［The fragments of tàla leaves of the unknown Buddhist sutta］	ND 1640 = 特
	［A manuscript of Buddhist sutta in Elu language on palm leaves］	ND 1660 = 特
	大般若波羅蜜多經［書写資料］．巻第70 / 玄奘 譯	ハ5 1041
	大般若波羅蜜多経巻第十断簡［書写資料］	イ4 3164 131
	大般若波羅蜜多経巻第十断簡［書写資料］	イ4 3164 132
	Holy Koran（Qur'an）	ND 1445 = 特
	القرآن; عثمان الزهني الاقبكادى (Qur'an)	文庫33 594
	［礼記子本疏義］［書写資料］．第59 /［鄭灼］［撰］	ロ12 1134
きまりごと	Magna carta, 15 June 1215.	F323.3 110
	［Magna Carta cum statutis］	F322.3 43
	切支丹制札［博物資料：武州多摩郡境村	ハ7 4666
	長崎御掛所之御高札之寫	文庫8 D396
	［江戸幕府諸法度及び條目書］［書写資料］	ワ3 6422 1-12

（てぃむそん　じょうなす　㈱早稲田大学アカデミックソリューション出向
※2022年11月まで早稲田大学図書館資料管理課）